上尾市史

第十卷

別編3

民俗

五　天王様

（一）　平方のどろいんきょ

概観と沿革　平方のどろいんきょは、本来、七月一四日・一五日に行われてきた夏祭りとか天王様といわれる行事である。どろいんきょとは、水を大量に流してぬかるむような状態にした民家の庭で、白木の頑丈な隠居神輿を、泥だらけにして転がす行事を指す。この部分が非常に珍しいことから強調され、祭り全体をどろいんきょと呼ぶようになった。

平方は、上宿・下宿・南・新田の四地区に分かれる。このうち、上宿と下宿は、上尾から川越に抜ける主要街道沿いの町場であった。特に、上宿の西端には荒川が流れており、ここには江戸時代から大正時代の間に栄えた河岸場・平方河岸があった。

この四地区が、平方上宿に鎮座する八枝神社の例祭として、夏祭りを行っている。以前は、四地区合同の祭りであり、四地区を順番に神輿と隠居神輿が渡っていたが、大正一二年の祭りを最後に、四地区合同でのどろいんきょを伴う夏祭りは行われなくなっている。ただし、下宿では、昭和一〇年・一一年の夏祭りのとき、自分たちで隠居神輿を作り、下宿の地区内を巡行している。また、上宿では、昭和二三年・二四年の夏祭りのとき、個人で作った小型の隠居神輿を巡行させている（八枝神社文書一七四・五八五）。この当時は、四地区合同で隠居神輿の巡行はしないものの、狛狗大神と呼ばれる「お獅子様」の巡行は行っていた。しかし、第二次世界大戦後になると、

大正年間のお山出し

四地区では八枝神社からそれぞれ神輿を出してもらい、別々に夏祭りを行うようになった。

その後、上宿では、昭和四八年に若い衆を中心に本格的にどろいんきょが復活した。昭和五〇年ごろからは、地区を挙げて行うように体制も確立し、「平方のどろいんきょ」は上宿のみで行われるようになった。期日も、七月下旬の日曜日に行っている。

期日と時間　夏祭りの期日は、七月一四日・一五日の二日間であった。八枝神社には、大正年間の神輿渡御式に当たって、管轄する大宮警察署長に提出した執行届の控がある。これによると、神輿の渡御の時間帯は、大正八年には一四日が午後二時から午前零時、一五日が午前五時から午後七時、大正一二年には一四日が午後三時から午前零時、一五日が午前四時から午後八時となっている（「進達書綴」八枝神社文書一三二）。この当時、神輿や隠居神輿などの巡行は、上宿→南→下宿→新田と回り、再び上宿に戻る形で行われていた。このため、実際にはこの時間帯を超過していたものとみられる。

第二次世界大戦後、上宿・下宿・南・新田の四地区は、別々に夏祭りを実施するようになる。現在では、上宿が七月二〇日過ぎの日曜日、他の三地区が七月一四日に近い日曜日に夏祭りを行う。このため、三地区で夏祭りを行った翌週に、上宿が夏祭りを行っている。

上宿の夏祭りは、午後一時にお山出しといって、神輿と隠居神輿が八枝神社を出発する。出発した神輿と隠居神輿は、一〇か所ほどの神酒所を回り、このうち五か所ほどの神酒所で「どろいんきょ」を行う。すべての神酒所を回り終わった神輿と隠居神輿は、午後九時三〇分ごろお山納めといって八枝神社に戻り、祭りは終了する。

組織　平方のどろいんきょを含む平方の夏祭りは、神輿を出す八枝神社と上宿・下宿・南・新田の各地区が実施している。各地区には、氏子総代のほか、若い衆頭・当番といった役割がある。氏子総代は、全体を統括する役割であり、実際に祭りを差配するのは若い衆頭である。

上宿の若い衆頭は、四人で任期は二年である。家並みで順番に役割が当たるのではなく、若い衆頭自身が適任者を次期の若い衆頭として選び、引き継ぐ形をとっている。適任者として、当番を経験したことのある祭りに熱意のある人を選んでお願いするのである。若い衆頭は、二年目の年に次期の若い衆頭を選び、三月三日の天王講で披露する。このときから次期の若い衆頭は、見習いといって、一年間若い衆頭とほぼ行動を共にすることになる。

一方、上宿の当番は、上宿の年間行事の準備や世話をする仕事である。若い衆頭と同様に、後任の当番は、その年の当番が適任者を選び、お願いして引き継ぐ形をとっている。選考の基準も、若い衆頭と同じように祭りに熱意のある人を選ぶが、若い衆頭よりも若年の者を選ぶことになっている。当番の場合、任期一年目を表、二年目を裏といい、それぞれ二人ずつである。表当番が主として仕事をする当番であり、裏当番はその指導役である。表当番を一年間経験すると、翌年の天王講までに新しい表当番を選考・依頼して、裏当番となる。

本来は、若い衆といわれる各地区の若者が中心になり、行事を行った。現在、上宿では、若い衆が主な部分で祭りを行うが、町内の

各種団体の役割も欠かせない。このため、夏祭り実行委員会を組織している。実行委員会には、若い衆のほか、上宿区の区長・区長代理・会計・班長・顧問・氏子総代・囃子連・愛育班・交通安全母の会・体育協会・子供会・消防団・踊りの会代表が加入する。

祭りの相談　夏祭りの準備は五月下旬ごろから始まる。最初に、上宿内部での集会が行われる。今日では、例外なく毎年実施されているが、本来はこうした会合の中で隠居神輿の巡行も含めて、その年の祭りをどのように行うかが決められていった。内部の会合としては、現在、若い衆の集会・女性の集会・各種団体の代表者の集会である実行委員会がある。こうした集会では、若い衆頭が立てた計画について承認が採られる。

その後、六月二四日には、祭り願いと呼ばれる会合がある。これは、八枝神社の社務所、八枝神社宮司と上宿・下宿・南・新田の総代、若い衆頭・当番（行事）が出席して行われる。以前は、この四地区合同で夏祭りを行ったため、この祭り願いは四地区の夏祭り実施について相談し、決まった内容を神社にお願いする場であった。現在では、四地区がそれぞれ夏祭りを実施するため、各地区で計画を説明し、祭りの実施をお願いするという形になっている。ここで決定される内容は、各地区の夏祭りの期日と神輿の準備を行う期日である。また、八枝神社では、四つの神輿を準備するが、この割り振りのためのくじ引きも行われる。通常は、七月二〇日過ぎの日曜日に上宿の夏祭り、その前週の日曜日に三地区の夏祭り、前々週の日曜日に四地区揃って神輿の準備がそれぞれ行われる。

以前は、祭り願いの場で、実際に各地区の意見を集約して、夏祭りの実施方法を決めていた。特に、隠居神輿によるどろいんきょを四地区で行っていた大正年間までは、神輿と隠居神輿の巡行を含めてすべての行事を行うか、神輿は巡行させずに神輿の先払いであるお獅子様だけ巡行を行うか、神輿はすべて神社に据え置きにして祭典のみにするか、などの選択肢があった。特に、農村部である南や新田は、不作の年の夏祭りを簡素にするような要望が多かったという。

こうした祭り願いのやり取りや、その結末について、大正三年の事例を基にみると、六月二四日午後三時、総代と各地区の年当番が八枝神社社掌宅に集った。このとき、上宿と下宿は「旧例ニ依リ御輿、隠居ヲ渡御シタシ」と意見を述べ、隠居神輿も含めた神輿渡御を望んだ。一方、南は、この年秋に御大礼が予定されており、費用が掛かるため、「神輿ノ渡御巡廻ハ延期」して祭典のみにしたいと希望した。新田は、さらに厳しい見方で、本年は「非常ノ不景気」なので、費用の掛かることは祭典も含めて一切休止にしたいと要望した。このように意見が分かれたため、二六日に再議となったが決まらず、字内の相談委員会を翌二七日に開き、祭典と神輿の先払いであるお獅子様（狛狗大神）の渡御だけ実施し、神輿や隠居神輿の渡御は行わないことに決定した（「八枝神社日記」八枝神社文書一八二）。

お仮屋　七月七日をお仮屋という。以前は、この日に、八枝神社境内に仮設の建物であるお仮屋を建て、神輿を遷座した。現在では、お仮屋を建てずに、八枝神社境内の神楽殿をお仮屋として利用している。神輿の遷座は、上宿夏祭りの二週間前の日曜日に行われている。

また、幟竿を立て、祭りのための幟を上げ始める日である「幟立

て」もこの日であった。幟竿は、四地区でそれぞれ二本ずつ、一六日に幟竿を倒す「幟返し」の日まで立てておき、その間、毎日当番が幟を上げた。上宿では、以前は地蔵堂の前に立てた。どろいんきょ復活後は、竿を立てずに地蔵堂裏の火の見櫓（やぐら）に付けて飾っていたが、近年は八枝神社の鳥居付近に幟竿を立てている。現在、幟竿は、夏祭りのおおよそ一週間前に立て、祭り後、適当な日に倒している。

このほか、お仮屋の日から夏祭りの日まで、各家では軒先に、「御祭礼」と書かれた軒提灯（ちょうちん）を下げる。以前は、すべての家で下げていたが、現在でも家によっては下げている。

なお、現在では、お仮屋の晩に、囃子連の人々が「お仮屋」といって、祭り囃子の演奏を行う。これは、お仮屋である神楽殿で演奏するもので、以前は、この日から夏祭りの前夜まで、毎晩行ったという。

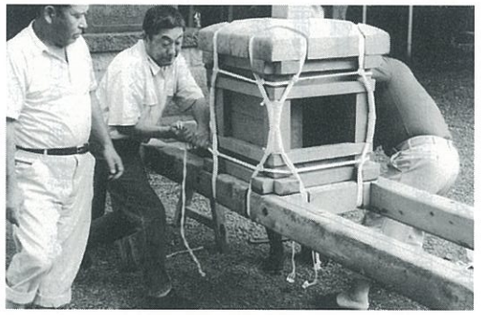
祭りの準備　現在、夏祭りの準備として、神輿縛り・提灯の飾り付け・本部の設営・草刈りなどを行っている。神輿は、普通の神輿と隠居神輿の二つがあり、普通の神輿は紅白の縄で屋形と担ぎ棒を縛り付ける。隠居神輿は、化学繊維の縄で屋形と担ぎ棒を縛り付ける。隠居神輿を縛る縄は、以前は竹縄であったという。竹縄は、普通の縄に比べて切れにくいが、化学繊維の縄の方がより丈夫である。普通の神輿の準備は、下宿・南・新田と一緒に行うため、上宿の夏祭りの二週間前の日曜日になる。

提灯の取付けや、祭り本部の設営、草刈りなどは、夏祭りの前週の日曜日に行う。提灯は、電球が点灯する形で、神輿・隠居神輿が巡行する道筋に付ける。また、祭り本部は、当日の受付や接待などに使う仮設の建物で、地蔵堂前に設営する。これらは実行委員会で手分けをして行われる。

神輿の種類　現在、神輿は、神輿・隠居神輿・子供神輿・大神輿の四基が出ている。夏祭りで担ぐ神輿は、本来、大神輿であったが、大正一二年の夏祭りで大破してそのままになっていた。それ以降、現在まで、神輿が祭りの中心となる神輿となっている。昭和五〇年にどろいんきょが復活した際、上宿の若い衆が大神輿を修理して出すようになった。ただし、人手不足のため、お山出しとお山納めの前後だけ担ぐようになっている。また、子供神輿は、子供会で担ぐ神輿として、近年作られたものである。したがって、本来は、神輿と隠居神輿だけであった。

神輿には、現在八枝神社に四基あり、大きさも大小がある。神輿は、もともとお獅子様の東京方面への巡廻に使った神輿で、大神輿が大破したため、これを夏祭りの神輿として使用するようになったのである。第二次世界大戦後、上宿・下宿・南・新田が別々に夏祭りを行うようになり、この神輿より少し小さな神輿と、新たに二基同じような神輿を作り、合計四基となって現在に至っている。この四基の神輿のうち、どの神輿をどこが使うかは、毎年くじ引きで決められる。ただし、どろいんきょ復活後は、上宿で盛大に行うため、一番大きな神輿を当てた地区は、上宿のくじと交換するようにしている。

隠居神輿は、白木造りの二天の神輿である。トンボと呼ばれる二本の担ぎ棒は檜（ひのき）製で、屋形の部分は欅製であった。普段は、トンボ・屋形・屋形の屋根の三つに分解して保管しており、祭りの前に



隠居神輿の組立て

組み立てて、屋形の四隅を化学繊維の縄で縛る。以前は、竹縄で鳶職の頭が縛った。竹縄は、普通の縄より丈夫であったが、それでも転がしていると切れるので、切れると鳶の頭に縛ってもらった。現在の化学繊維の縄は、竹縄より丈夫であり、切れることはない。現在は、どろいんきょ復活の際に、当時の頭から教えてもらった者が、さらに後輩の指導に当たっている。

当日の日程　祭りの当日には、午前六時に地蔵堂前に設営した祭り本部で、上宿の囃子連によるアサッパヤシ（朝囃子）が行われる。その後、各班では神酒所の準備が行われ、このほか、当番による各家のお祓いが行われる。

午後一時には、八枝神社でお山出しが行われ、神輿や隠居神輿が各班で設営した神酒所を回る。一〇か所程度の神酒所のうち、五か所ほどでどろいんきょが行われる。このほか、午後二時ごろ、九班の神酒所で行われるどろいんきょの最中に、隠居神輿を担いで荒川に入ったり、午後六時ごろ、一班の神酒所で行われるどろいんきょの最中に隠居神輿の移動を行い、山車と呼ばれる行事を行うなどする。すべての神酒所を回り終えた神輿や隠居神輿は、午後九時三〇分ごろに八枝神社に戻る。これをお山納めという。

神酒所の準備　神酒所は、班単位で設営する。上宿には一〇の班があるが、現在は五班と九班が合同で一つの神酒所を出すため、九つの神酒所ができる。班の中で、広い庭のある家を神酒所にするのが一般的である。広い庭とは、一般的な農家の前庭のような形の庭をいい、母屋の南側に広がる庭のことである。上宿は、こうした庭を持つ家が比較的少ないため、神酒所はほとんど固定している。九つの神酒所のうち、こうした庭を神酒所とするのは、一班、四班、五班・九班の三か所だけであり、この三か所ではどろいんきょも行われる。このほか、八班と二班の神酒所でもどろいんきょを行うが、八班は民家の裏庭、二班は駐車場となっている場所でどろいんきょを行っている。これ以外の神酒所では、休憩だけする。

神酒所では、ビールや酒・ジュースなどの飲み物、握り飯や豆腐・てんぷらなどを出す準備をするほか、竹を二本用意して、入口の両端に立て、その間に注連縄を張る。このほか、神輿や隠居神輿を置くための台を用意する。本来は、立ち臼を逆さまに置いた上に神輿や隠居神輿を置くが、現在では専用の台を作ったり、ビールケ

ース等で代用する神酒所も多い。

このほか、どろいんきょを行う神酒所では、大量の水を用意する。どろいんきょでは、大量に水を撒くため、大きな桶やドラム缶などに、午前中から水をためておき、事前に庭にも水を撒いておく。

当番による お祓い　現在、祭り当日の午前中には、当番四人が二人ずつ二組に分かれて手分けをし、上宿の全戸をお祓いして回る。一人がお祓いをするための御幣を持ち、もう一人が賽銭箱を持つ。当番には、一年目の表当番二人と二年目の裏当番二人がいるが、表・裏一人ずつで一組となるように組む。各家では、玄関先でお祓いをして、半紙に包んだ賽銭をもらう。家によっては、お守りとして、御幣を少しちぎっていただくこともあった。

第二次世界大戦前には、お祓いだけでなく、八枝神社の狛狗大神も一緒に回った。狛狗大神とはお獅子様のことである。平方では、三月三日・四日のフセギ行事で、八枝神社のお獅子様が全戸を回ったが、夏祭りの神輿巡行の前にもお獅子様が回った。お獅子様が回るときにも、お祓いと賽銭持ちは付き物であり、この一行から最も肝心なお獅子様だけが欠落して、現在のお祓いの形になっている。

お山出し　神輿と隠居神輿を八枝神社のお仮屋（神楽殿）から担ぎ出すことを、お山出しという。お山出しは、神輿と隠居神輿などが置かれているお仮屋の前に、神輿の担ぎ手である若い衆が集合し、午後一時から行われる。

最初に、若い衆頭のあいさつと注意事項の伝達が行われる。このとき、特に荒川に神輿を担いだまま入らないようにという注意がある。その後、若い衆に湯飲み茶碗に注がれた御神酒が出されるので、これをいただく。次に、八枝神社宮司が神輿渡御前の祭典を行う。祭典が終わると、氏子総代の手締めが行われ、これが終わると同時に若い衆が神輿を降ろすために飛び掛かる。また、同時に囃子連が祭り囃子を始める。

お仮屋から降ろされた神輿と隠居神輿は、それぞれ境内で右に左に揉んで歩く。担ぐ若い衆は、境内から早く出そうとする者、まだまだ境内で担ごうとする者など、さまざまな思惑が錯綜して、すぐには境内を出ず、しばらく揉み合いとなる。鳥居をくぐって境内を出るときには、必ず神輿が先で、隠居神輿が後になるようにする。こうした指示は、若い衆頭や当番が行う。このほか、子供神輿や大神輿もお山出しのときに出発する。隠居神輿は、これらの神輿の先

お山出し

には出ないことになっている。隠居神輿が出ると、その後に囃子連が続く。

渡御　現在の渡御は、上宿だけで夏祭りを行うため、上宿内の神酒所を巡る形で行われる。経路は図39のとおりである。渡御の際には、神輿・隠居神輿・囃子連の順番で進む。子供神輿や大神輿が渡御に加わるときは、神輿と隠居神輿の間に、子供神輿・大神輿の順で入る。隠居神輿以外の神輿は、担ぎ棒を井桁（いげた）状に組んであり、この担ぎ棒の下に担ぎ手の肩が入るようにして担ぐ。また、「わっしょい、わっしょい」などと掛け声を掛けて、神輿を上下に動かしながら担ぐこともある。これに対して隠居神輿は、担ぎ棒が二本で比較的重いため、担ぎ手は肩を神輿の中央部に寄せるような形で担ぐ。上下に動かすようなこともなく、二本の担ぎ棒を担ぐ者が双方から押し合うようになり、多少左右にふらふらと曲がりながら渡御する形になる。

渡御の途中には、囃子連が、基本的にニンバ（仁羽）と呼ばれる賑やかな曲目を演奏する。このほかに、コモリウタ（子守歌）やカマクラ（鎌倉）を演奏することもある。鎌倉は、シズカモノ（静か物）といわれるように穏やかな曲である。鎌倉が演奏されているときには、担ぎ手が「オババ」と呼ばれる歌をうたうことがある。「オババ」とは伊勢音頭のことで、最も代表的な歌が「オババなー」という歌い出しであることから「オババ」と呼ばれているのである。オババには、次のような歌詞がある。

おばばなー　ハハヨーイ
どこへきゃろい　三升樽下げてよ　アラヨイトコショ
嫁の在所へ　ヤンデー　孫抱きによ
ソウトモ　ヤレトコセイー　ヨイヤナー　アリャリャー
コレワイサーノ　コノナンデモセー
ほれたなー　ハハヨオイ
ほれたあよー　川端柳は　アラヨイトコショ
水の流れで　ヤンデナー　根が掘れたよ
ソウトモ　ヤレトコセイー　ヨイヤナー　アリャリャー
コレワイサーノ　コノナンデモセー

どろいんきょ　神輿や隠居神輿などが神酒所に入ると、担いでいた各神輿を安置する。このときには、本来は立ち臼を逆さまに置いた上に安置するが、現在では他の物で代用することが多い。安置された神輿の前には、それぞれ湯飲み茶碗に入れられた御神酒を供える。その後、一〇分から四〇分程度の間、神酒所で飲食の接待を受ける。酒・ビールのほか、神酒所によって異なるが、握り飯・稲荷寿司・豆腐・てんぷら・漬物・枝豆・きゅうり・こんにゃくの煮物・鶏の唐揚・コロッケ・バナナ・すいか・とうもろこし・菓子などが出される。

休憩の後、どろいんきょを行わない神酒所では、そのまま神輿を担ぎ出して次の神酒所に向かう。どろいんきょを行う神酒所では、休憩の後、神輿を担ぎ出す直前にどろいんきょを行う。

どろいんきょに参加する若い衆が隠居神輿の近くに集まり、若い衆頭の経験者といった主だった者が、まず供えてある御神酒を隠居神輿のエボシ（屋形の最上部）に掛ける。次に、同じ部分にバケツで水を掛け、これを合図に台から隠居神輿を地面に転がり落とすよ

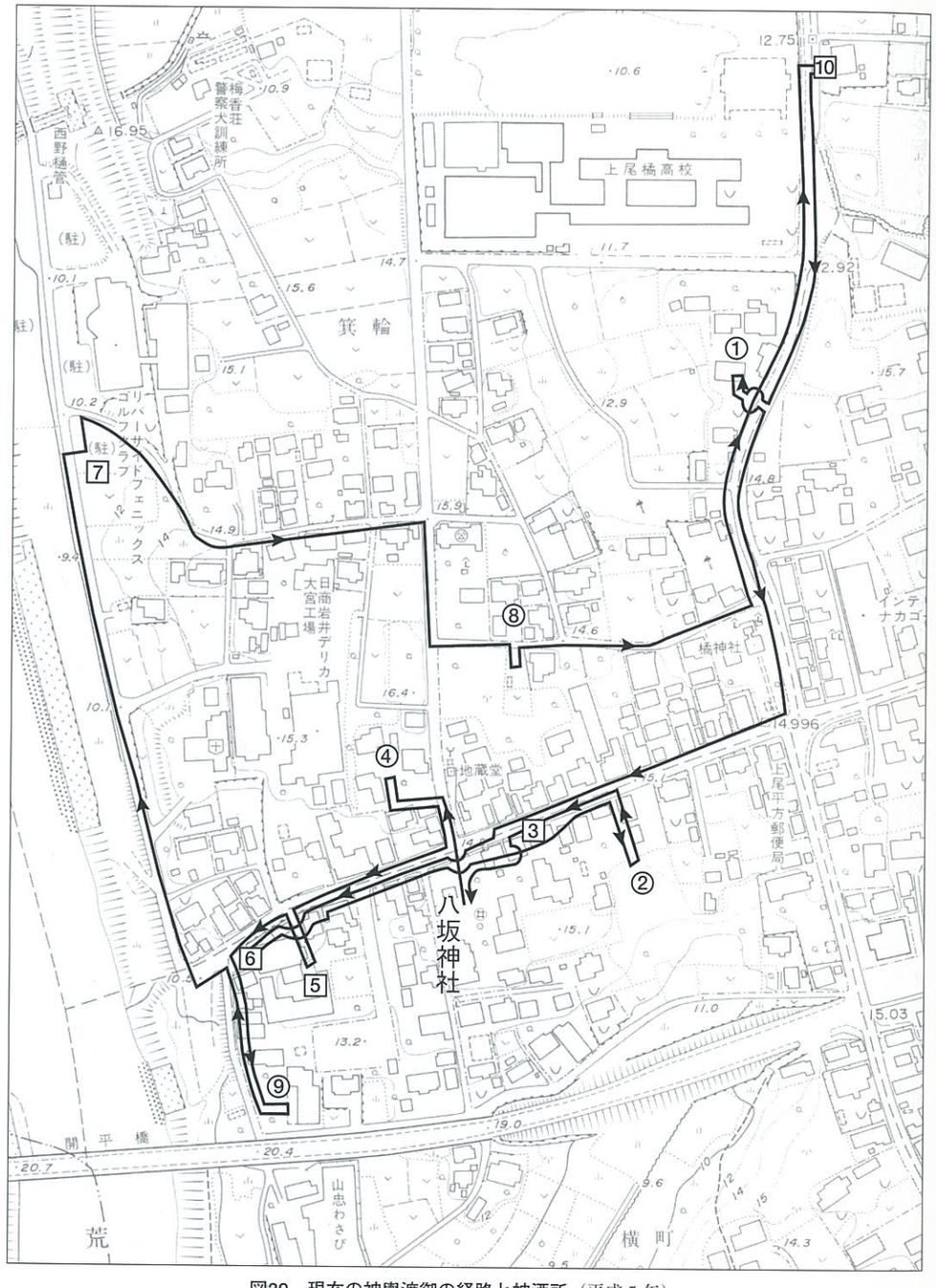


図39　現在の神輿渡御の経路と神酒所（平成５年）
注　○=どろいんきょを行う神酒所　□=休息だけの神酒所　数字は班の番号を表す。
順路　八枝神社→④→⑤→⑨→⑦→⑧→⑩→①→⑥→②→③→八枝神社

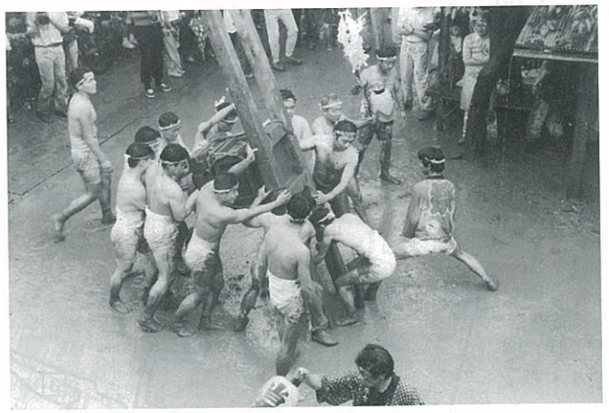
うにして、どろいんきょを開始する。

どろいんきょを行うときには、一〇人から一二人程度の若い衆が隠居神輿を転がす。転がす場所には、あらかじめ水を流しておき、既に泥水がわずかにたまっている状態にしておく。このため、転がし始めると、すぐに隠居神輿や転がす若い衆は泥だらけになる。さらに、転がしている最中にも、隠居神輿と転がしている若い衆に対して、周囲の者がバケツで水を掛け続ける。

隠居神輿を転がすときには、若い衆がトンボと呼ばれる担ぎ棒の部分を両方から押し合う状態になるため、回転したり移動しながら庭を転がる。どろいんきょを行っている最中に、隠居神輿のトンボを、地面と垂直に立てて倒すことがある。このことを、トンボガエシとかタテガエシという。転がし方については、当番・若い衆頭・若い衆頭の経験者が、提灯やお祓いを振りながら指示する。

どろいんきょが始まると、囃子連はヤタイ（屋台）と呼ばれる曲目を演奏する。どろいんきょは、一〇分から三〇分ほど行われるもので、終えるときには、若い衆頭や当番が指示を出す。すると、囃

転がり落としてどろいんきょ開始



タテガエシ

水を掛けられながらのどろいんきょ

子連は、祭り囃子をニンバに変える。また、隠居神輿以外の神輿は、順次出発する。このとき、まだ隠居神輿を転がしており、神輿が出終わると転がすのをやめて担ぎ、神酒所を後にする。

山　車

現在、一班の神酒所では午後五時ごろに、どろいんきょが行われている。このどろいんきょの最中に、若い衆たちは隠居神輿を天地逆さまに担いで、荒川川岸の旧開平橋詰付近に向かう。ここで隠居神輿を山車に模様替えする。基本的には、隠居神輿のトンボが地面と垂直になるように立て、このトンボと地面の接する部分の少し上に、曳行するための長い縄を付け、この縄で垂直に立った隠居神輿を山車に見立てて曳くのである。トンボの前の部分を下にして引きずって曳行するため、トンボの前の先は擦り減っている。

隠居神輿をただ立てただけでは倒れてしまうため、屋形の最上部であるエボシの部分に、地面と平行になるように棒をくくり付け、ここの棒に若い衆が肩を当てて押さえながら進む。また、立てた隠居神輿の最上部からロープを垂らし、これを前後で引っ張り合いながら倒れないようにしている。

また、隠居神輿の屋形の部分を踏み台のようにして、芝居の主人公に扮した若い衆二人が乗る。以前は刀を差したり、兜をかぶったり、蓑笠を着る程度であったが、現在では、世話物の芝居に登場する男女の主人公を題材にして、演劇関係者を頼んで本格的な衣装やかつら・化粧で扮装している。例えば、桂川連理柵のお半長右衛門、小袖曽我薊色縫の十六夜清心などを題材にしている。

山車は、荒川川岸から上宿の通りを郵便局前まで進み、郵便局前の交差点で左折して一班の神酒所前まで向かう。途中、八枝神社鳥居前では、鳥居の方向に山車を向け、若い衆たちが手締めをする。

一班の神酒所前に到着すると、扮装した若い衆が降り、隠居神輿を元の姿に戻し、再び天地逆さまに担いで、一班の神酒所の中に入り、どろいんきょを続ける。一班の神酒所では二回どろいんきょを行うようにみえるが、実際は、どろいんきょの最中に逆さまに担いだ隠居神輿だけが「山車」の行事を行い、その後戻って来てどろいんきょを続けるといった考え方である。このため、神輿は「山車」の行事の間、一班の神酒所を動かない。しかし、囃子連は、山車の曳行の際にも演奏するため、一緒に動いて行動する。なお、山車の曳行のときに囃子連は、牛車を改造して作った囃子屋台に乗り、鎌

隠居神輿による「山車」の曳行

倉を演奏する。ただし、途中、囃子屋台の上でひょっとこ踊りを踊るときにはニンバを演奏することもある。

荒川入り　現在、五班と九班の合同の神酒所では、午後二時ごろにどろいんきょが行われる。このどろいんきょの最中に、若い衆たちは隠居神輿を逆さまに担ぎ出し、近くの荒川に向かう。この神酒所は、旧開平橋に近接しており、以前は旧開平橋上から、現在はそのやや上流の川岸から、隠居神輿を川に入れるのである。

川に入った隠居神輿は、五分から一〇分ほどで、川岸に上がる。このときも天地逆さまに担いでおり、そのまま五班・九班合同の神酒所に戻ってどろいんきょを行う。

隠居神輿の荒川入り

このように、荒川入りは、「山車」の行事と同じような扱いで行われている。しかし、「山車」の行事が、実行委員会で作成するプログラムに予定時間も含めて掲載されているのに対し、荒川に入る行事は掲載されていない。また、前述したように、お山出しの際には、祭りを指揮する若い衆頭から、川には入らないよう注意が出されている。しかし、実際には、川に入るための川岸の草刈りが事前に行われ、川に入れるかどうか水位を見ており、川に入って泳げる者とそうでない者を区別するための識別がなされ、流された際の安全策までとられるなど、周到な準備がなされている。

お山納め　神輿と隠居神輿が八枝神社に帰って来て、お仮屋（神楽殿）に戻ることをお山納めという。お山納めは、現在、午後九時三〇分ごろの予定となっている。

予定されている最後の神酒所を出発した神輿と隠居神輿は、八枝神社に向かう。お山出しのときに、なかなか八枝神社境内から神輿が外に出ないように、お山納めの際にも、八枝神社に神輿が入る場面で、境内に入れようとする者と、まだ入れまいとする者がいて、入りそうになっても戻されるようなことが繰り返される。

境内に入るのも神輿が先で、隠居神輿は後である。ようやく境内に神輿が入り、続いて隠居神輿が入って来るが、お仮屋に安置するのも神輿が先で、隠居神輿が後である。二基の神輿がお仮屋に納まるとお山納めは終了する。納まった隠居神輿の前には、当番の使っていたお祓いが立て掛けられる。最後に、若い衆がお仮屋の前に集まり、最初に神社総代、次に若い衆頭が手締めをして祭りは終了する。

後片付け　祭りの後片付けは、翌月曜日の早朝に行われる。大正時代にどろいんきょを行ったころにも、翌日である七月一六日に片付けを行った。当時は、荒川の河原で隠居神輿などを洗ったので、片付けのことを神輿洗いといった。

現在の後片付けは、実行委員が集まって、隠居神輿の解体、提灯や祭り本部の撤去が行われる。隠居神輿は、再び、屋形、屋形の屋根、担ぎ棒であるトンボに解体される。この三つを縛り付けてある縄は、結び目を残すようにして切られる。この結び目は、家の入口に付けておくと魔除けになるといって、二つは当番に、残り二つは希望者に渡される。

後片付けが終わると、以前は天王講と呼ばれる宴会が開かれた。現在では、実行委員会や若い衆の反省会が行われている。

隠居神輿の結び目を切る

家の入口に掛けられた結び目

（二）上尾夏祭り

概観と沿革　上尾夏祭りは、本来、天王様・祇園祭・夏祭りなどといわれ、中山道沿いの町場である、上町・宮本町・仲町・愛宕町の四町内で、七月一四日・一五日に行ってきた祭りであった。この四町内は、宮本町にある氷川鍬神社の氏子であり、氷川鍬神社ではこの夏祭りを例大祭としている。昭和七年七月一六日付けの東京日日新聞には、「上尾町御鍬神社大祭　上尾町御鍬神社大祭は十四、十五の両日にわたって挙行され神輿屋台等が町内をねり歩きなお夜は同町芸妓連総出の手踊り等があつて頗る盛大であった」と写真入りで掲載している。

その後、昭和三〇年代になると、旧上尾町の範囲全体で行うような様相となり、中山道沿いの町場四町内のほか、本町・谷津・柏座といった地域が参加するようになる。祭りの内容についても、神輿の連合渡御が中心になってきている。昭和三二年の『上尾自治だより三一号』によれば、「一三日午前に上町、宮本町、仲町、愛宕町の四町内が、午後に柏座、谷津、本町、緑ケ丘の四町内が、それぞれ氷川鍬神社に勢揃いして、修祓の後、中山道を渡御した」としている。また、翌三三年は、市制が施行されて上尾市が誕生した年であり、その記念行事と夏祭りが、時期を合わせて並行して行われた。このときには、一四日午後一時から上町・宮本町・仲町・愛宕町・柏座・谷津・本町の七町内の神輿、大小一三基が、氷川鍬神社での修祓（しゅうふつ）の後、中山道を連御した（『上尾自治だより四〇号』）。しかし、このころは、毎年神輿渡御をする祭りを行ってはいなかった。昭和三七年の『上尾自治だより八五号』では、五年ぶりの神輿渡御として

上尾市史　第十巻　別編3　民俗
（第10回配本）

平成十四年三月三十一日　発行

編集　上尾市教育委員会
発行　埼玉県上尾市
〒二六二―八五〇一　埼玉県上尾市本町三丁目一番一号

制作　閑山房